

岡野英之著

『アフリカの内戦と武装勢力 ——シエラレオネにみる人脈ネットワーク の生成と変容』

昭和堂、2015 年、6,800 円＋税、xvi＋427 頁

佐川 徹

1991 年から 2002 年まで続いたシエラレオネ内戦は、約 7 万人が死亡し、約 260 万人が難民・避難民となる凄惨な内戦だった。この内戦では、残虐な暴力行為が頻発し、多くの子供兵が動員され、ダイヤモンドの違法取引から得た資金が紛争に用いられた。これらの側面がややセンセーショナルに報道されたこともあり、内戦に対する国際的な関心は高く、内戦が継続している時期から多くの研究がなされてきた。

だが著者によれば、それらの研究の大部分は内戦の一方の主体である反政府勢力 RUF (Revolutionary United Front) に関するものであり、RUF に対抗した政府側の勢力への注目は集まってこなかったという。そこで本書は、政府により動員された武装勢力であるカマジョー (kamajor) と CDF (Civil Defense Force) に焦点を当てることになる。内戦末期、CDF は RUF を上回る 3.7 万人以上もの戦闘員を抱える集まりであった。この巨大な武装勢力の姿を知ることなくして、シエラレオネ内戦の全体像が理解できないことは明らかだろう。以下では本書の構成を記したあとで、その内容をまとめよう。

419

- 序 論 シエラレオネ内戦を学際的に考察する
- 第1章 シエラレオネ内戦とカマジョー / CDF の概要
- 第2章 仮説の構築と分析枠組みの設定
- 第3章 調査・研究の手法
- 第4章 歴史的背景
- 第5章 内戦勃発とカマジョー形成以前の展開
- 第6章 小さなネットワークの誕生
- 第7章 統合を重ねる PC ネットワーク
- 第8章 優位な PC ネットワークの台頭 (ジェンデマ・カマジョー)
- 第9章 入れ替わった優位な PC ネットワーク

第10章 政府系勢力 CDF という PC ネットワークの確立と解体

第11章 内戦を生きる人々

終章 人脈ネットワークとしての武装勢力

序論から第4章では、本書の問題意識や仮説、分析枠組み、方法論が提示されるとともに、シエラレオネ内戦やカマジョー／CDFの基本情報が説明される。カマジョーとは、シエラレオネの東部から南部にくらすメンデ人が、内戦中に各地で形成した自警組織を指す。CDFはカマジョーを中心としながら、他民族の自警組織も巻きこんでつくられた政府系の武装勢力である。CDFは内戦後期に形を成していったが、確固とした外延を有した組織ではなく、複数の武装勢力のゆるやかな結合体として捉えられるべきだという。

著者は本書を「人脈の民族誌」(9頁：以下、本書からの引用頁は数字のみ記す)、あるいは「人脈ネットワークの民族誌」(372)と位置づける。古典的な民族誌では、特定の民族や場所に焦点をあててその内部構造の解明を試みる。だが、武装勢力は既存の集団や空間の境界を超えて戦闘員の動員を図ることを考えれば、そのような対象の限定は武装勢力の実態を捉えそこなうおそれがつよい。そこで本書では、特定の人物が有する人脈ネットワークに着目する。人びとがいかなる人間関係をとおしてカマジョー／CDFに加わり、そこで活動し、またそこから離れていったのかを再構成することで、流動性に満ちた武装勢力のあり様を描きだすことができるのだという。

人脈ネットワークの生成と変容を把握するために、著者はシエラレオネ内戦に関する先行研究や報告書、新聞記事を読み解くとともに、シエラレオネとその隣国リベリアで2007年からの5年間、合計174日にわたり、カマジョー／CDFの元構成員への聞き取り調査をおこなった。本書では、CDFで指導的役割を担った3名と、CDFの一部隊の元司令官である1名の人脈ネットワークに焦点が当てられる。

本書の議論の枠組みは、アフリカの国家と武力紛争をめぐる政治学の知見に依拠している。キーワードは、「地位や財力が異なる二者間での相互依存関係」(63)と定義されるパトロン＝クライアント関係と、複数のパトロン＝クライアント関係が接合することで形成されるパトロン＝クライアント・ネットワーク(PCネットワーク)である。アフリカの多くの国では、為政者と行政幹部、一般国民の間にPCネットワークが張りめぐらされてきた。為政者は、私物化した国家の資源を従属者に配分することでPCネットワークを形成し、統治の基盤とした。しかし、冷戦終結前後の大規模な政治・経済変動によって、利用可能な資源が減少したその配分方法が変化することで、既存のPCネットワークは分裂した。それにともない統治が不安定化することで、アフリカには紛争が頻発した。

著者は政治学者によるこのような説明に一定の評価を与えながらも、PCネットワークを過度に静態的に捉えている点を批判する。そして内戦の経過を捉える際には、PCネットワークが動的に変化していく側面に注目する必要があること、またその動態を把握するには、PCネットワークの背後に広がる「リゾーム状の人脈ネットワーク」(70)、つまりより広範で多様な社会関係を考慮に入れる必要があることを主張する。そこで本書では、カマジョー／CDFをPCネットワークにより構成された集まりとして捉えたうえ

で、多数のカマジョーの小さな PC ネットワークが、リゾーム状の人脈ネットワークに媒介されることで、単一の大きな PC ネットワーク、つまり CDF へ収斂していくプロセスが内戦の過程で展開していたことを仮説として、議論が進められることになる。

この仮説を実証するために、第 5 章から第 10 章ではカマジョーが形成され、CDF へと統合され、最終的には CDF が解体していく過程が、時系列に沿って整理される。シエラレオネ内戦の勃発は 1991 年だが、自警組織の結成が進んだのは、RUF がゲリラ戦でメンデ人のくらす農村を襲撃し始めた 1994 年ごろからだった。これらの組織は当初はチーフダムごとに形成され、その長たるパラマウント・チーフがリーダーを務めていたが、次第に単一のチーフダムを越えたレベルでその再編が進み、複数の大きな勢力が生みだされた。1997 年 5 月の軍事クーデターにより、RUF が新政権に加わると、カマジョーに対する解散命令が出された。これに反発したカマジョーは、RUF らとの敵対関係をつよめ、一部のカマジョーのメンバーが「メンデ人色」を排した CDF という名を考案すると、他民族の民兵もそこに合流した。2000 年以降に和平プロセスが進展すると、戦闘員は次第に CDF から離れ、2003 年にその指導的役割を果たしていた人物が逮捕されると CDF は解体した。

この一連の過程では、著者の仮説どおり、小規模な PC ネットワークが競合するなかで、優位な PC ネットワークが台頭し、最終的には CDF という一つの大きな PC ネットワークに統合されていく動きがみられたという。各 PC ネットワークの盛衰は、そのリーダーが戦闘員に配分する資源をどれだけ確保しえたかに依存した。第 11 章で取りあげられる人びとのライフヒストリーに示されているように、一般の戦闘員は、より有利な見返りを提供してくれるパトロンを求めて、各地の PC ネットワークへの出入りをくりかえしていたからである。

終章では、本書の内容が政治学、人類学、シエラレオネ研究にもたらす知見をまとめる。著者は、PC ネットワークが内戦中にダイナミックに変動していたことや、国境を越えて編成されていたことなどから、既存の PC ネットワーク観の見直しを迫るとともに、カマジョー／CDF の実態を明らかにしたことで、シエラレオネにおける伝統的権威と住民との関係や、内戦における残虐性の解釈などにも新たな示唆がもたらされたことを指摘する。

以上が本書の概要である。文書記録に残されていない武装勢力に関する細かなデータを収集することは、内戦中には治安上や倫理上の問題から困難であり、また内戦終結から長い時を経てしまえば正確な情報は集まりにくい。著者の調査は「今しかできない」重要な仕事である。また、アフリカの国家機構や紛争の背景にパトロン＝クライアント関係の存在を見出すことは近年では定型化した分析だが、じつはその関係の実態が実証的に示されることは少ない。政治エリートが違法に流用した資源を用いて形成した関係を調査することの難しさが、その一因だろう。それに対して、本書は調査時に内戦がすでに終結していたことや、著者が優れた調査助手にめぐりあったこともあり、元指導者層などへの聞き取りをとおしてカマジョー／CDF の PC ネットワークを構成した人間関係を細かく記述し

ている。高い評価に値する点だろう。ただし、PC ネットワークの形成と維持において、具体的にどのような資源がどれほどの量、いつだれにいかなる方法で分配されていたのかに関する記述は、もう少し充実させる余地があったかもしれない。

最後に、本書の立論に関して一点だけ疑問に感じた点を挙げておこう。著者は、従来の内戦研究が「現実には複雑に錯綜しているかもしれない人脈ネットワークを PC ネットワークに単純化することで現実を説明」(69) してきた点を問題視したうえで、「リゾーム状の人脈ネットワーク」という概念を政治学者 J-F. バヤールの著作からヒントを得て導入する。リゾーム状の人脈ネットワークとは、パトロン＝クライアント関係のようなタテの道具的な関係だけではなく、友人や親族、同郷会、相互扶助集団、職業組合など各人の多様な動機により形成された関係も含む。端的に言えば、社会に縦横に広がるすべての人間関係ということだろう。

だが著者は、せっかく導入したこのネットワーク概念を、あくまでも「PC ネットワークが組み上げられる時に機能した」(74) だけのものとして扱い、武装勢力の内部にはパトロン＝クライアント関係以外の作用をみようとししない。結果として本書には、「クライアントは〔パトロンが有する資源の多寡に応じて：引用者〕パトロンを自由に選び取ることができる」(369 頁) という一文に代表されるように、短期の経済合理性のみに依拠して意のままに行動選択する単純な人間像へ、人びとの多様な感情や動機を還元して理解してしまっているように感じられる箇所が少なくない。暴力行使を主目的とした集団に加わり、略奪に関与し、ときに人を殺す、という「ふつうの」人びとがなした「ふつうではない」行いをそれほどシンプルに理解できるものなのか、というのが評者の抱いた素朴な問いである。

著者は、本書では「あえてシンプルな解釈を提示し」(92)、「厚い記述を目指さなかった」(93) という態度表明をみずからおこなっている。そして、その理由のひとつは「近年、現象の多様性・複雑さが強調され、「多様なあり方を描く」という決まり文句のもと、難解な文章が書かれるきらいがある」(93) からだと記す。しかし、現象の多様性や複雑性を記すことと、それが難解な文章で表現されることのあいだに必然的なつながりは存在しない。また著者は、シンプルな解釈を提示することの利点として、そのような解釈には他の論者が反論しやすいため議論が喚起され、結果として現象に対する理解が深まっていく点を挙げている。だが、一般市民が内戦に参加する理由をシンプルな行動選択のモデルに依拠して説明する研究は、すでに多くの経済学者や政治学者が発表しているはずである。

本書が政治学と人類学を架橋する研究である点を著者が強調していることや、現象の細部にこだわる姿勢に人類学の学問的特徴があること、そして本書を読んだものならだれもが感嘆するであろう著者のたしかな筆力を考えれば、人びとが武装勢力に関与する動機やその背後にある人間関係の多様性や複雑性を過度に切り詰めることなく、カマジョー／CDF の興亡を理解可能な形でまとめられる可能性もあったのではないかと、と評者には感じられたのである。